

お 春

東京女子高等師範學校教授 岡 田 美 津

米國作家 Wiggins 女史の *Ralecon of the Sunnybrook Farm* は、子どもを中心とした小説のうち、最も優れたものとして、非常に歓迎せられたものです。岡田教授は其の自在の麗筆を以て、全く我國の讀みものゝ様に譯して下さいます。本誌はこれから常に、子どもに關係のあるいゝ文學を御紹介して、興味のない讀みものを提供したいと思ふのですが、其の第一に、岡田教授を煩はして此の名篇を得たことは、誠に幸のことです。毎號連載しますから、御愛讀を待たいと思ひます。(編者)

一 姉 弟 七 人

古びた乗合馬車 錦ヶ森から河崎へ通ずる埃ほりほい路をカタコトに進んでゐた。その日は未だ五月半ばであつたが、眞夏程に暑かつた。馭者の幸兵衛爺さんは、馬になるだけ樂をさせて居た……尤自分は郵便物を運搬してゐるんだといふのを忘れては居なかつたが。往く途は山坂が多かつた。幸兵衛は手綱を緩め、だらけた姿勢をして泥除板の上に片足をらくらくと伸してゐた。そしてフェルトの古帽子を眼深に被つて左の頬の中で煙草をもぐぐと嘸んでゐた。

馬車の中に一人御客がゐた。ベカ／＼する薄黄色のキャラコの着物を着た女の兒だつた。細つそりした身體に糊のきつい着物ミ來てゐるので皮蒲團の上でツル／＼とすくつて仕方がなかつた。中央の席の所に兩足を踏張ふんばつて木綿の手袋をはめた手を左右に突いて何とかして釣合を取らうとするけれど、馬車が路の凹所くぼみへゴトンミ入るか、石の上に乗り上げるかするミ、その身體が一旦宙に浮いて而してドタンと落ちた。するミその兒は妙な格好の麥藁帽子を後部うしろに押しやつて、桃色の

日傘を拾ひ上げるかその位置を直すかした。その傘さいふのが特別この兒の大事なものらしく見えたが、或は南京玉製の財布の方がもつと大切だつたのかもしれない。上つたり下つたりする路で苦しめられながら折さへあれば中を覗いて中身が減りもせず紛失もせぬのを悦んでゐる風だつた。幸兵衛爺さんはこの惱ましい旅の苦をちつとも察しなかつた。爺さんの役目は行先まで客を乗せて行けばいゝんで、途中を樂にしてやるには及ばないのだつたから。實のところ爺さんはちいさなこの心にも止まらない御客が乗つてゐたのを忘れてしまつてゐた。

その朝錦ヶ森の郵便局から爺さんが出掛やうとしたら女が一人荷馬車から降りて爺さんの傍へ来て、河崎行きに乗合かききたいり、幸兵衛さんさいふのは御前さんかミ尋ねたりした。さうださいいつたら、その女は返事を待ちかまへてゐた女の兒の方に合點いて見せた。するこそその兒が遅れてはならないさいふ風で走りよつて來た。十か十一位でもあらうか、何しろ年齢よりは小さく見える子だつた。母親はその子を馬車に手傳つて乗せてやり、その傍へ風呂敷包ミ紫はしどいの花束を置いてやつて、それから古袍を馬車の後へ括りつけるのを指圖し最後に大事さうに銀貨を數へく馬車賃を拂つた。

「河崎の私の姉の所へこの子を届けて御もらひ申したいんです。田中よねさいふのミニネさいふのを御存じですか。煉瓦の家に住まつてますが……」

「あゝ知つてるさこぢやねい、大知りだ」

「その家へこの子に行くんでね、先方^{さき}で待つてますよ。さうか氣を付けてやつて下さいまし。お春やさよなら、大人しくして行くのですよ、先方へ着いた時に着物がキチンミなつて居るやうに、馬車の中にチャンと座つて御いで。このおぢさんに御迷惑にならないやうに……この子は少しのほせてゐるんですよ……昨日畑ヶ谷から汽車で來て、昨夜は親戚に泊まつて、今朝そこから八哩つていひますが、馬車で來たのですからね」

「母さん、さよなら。心配しないでいゝわ。始めて旅に出るんでもないから」

母親は皮肉にかるく笑つて、幸兵衛に言譯らしくいつた。

「渡瀬へいつて一晚泊つて来た事があるんですよ、自慢になる程の旅でもないのに」

「母さんあれだつて旅行ですよ」と女の兒は大真面目で、しつこくつづけた「御辨當を籠につめて家を出て馬車に乗つて、汽車にも乗つて、そして寝衣をもつていつたのですもの」

母はこの旅行の思出話を遮つて、

「そんな事を世間中に言ひふらさなくたつていよこいひながら今となつてもまだ行儀の仕付けをしやうと思つて小聲で「寝衣だの靴下だのつて口に出すもんぢやないと言つたでせう……そんな事を大きな聲でしかも、男の人の前で」

「解つてよよ、母さん、だからもう言はない。只ね」……幸兵衛爺さんは此時舌打で馬に合圖をし、手綱をビシヤリこさせたので馬が靜に歩き出した。……「只ね、あの……」馬車はいよこ動き始めたのでお春は言ひかけた事を言ひ終らうとして、態々窓から首を出して「寝衣をもつて出れば旅行だこいふ事なの」

お春の甲高聲で言つた「寝衣」といふ語が、聞くまいとする母親の耳に入つて来た。母親は馬車が見えなくなるまで見送つて、店の腰掛に預けてあつた荷物を纏め、柱に繋いであつた荷馬車に乗つた。馬の頭を向けかへながら、母親は立ち上つて眼に手をかざして、遠くに見えてゐる埃の雲を娘の影かき見やつて、

「おみねはさぞ手がかゝるだらう。だがお春は御かけのものになるかも知れない」と獨言をいつた。

この経緯も三十分以前の事で、日は照りつけるし塵埃は立つし、暑さはひどいし、それに富田こいふ賑かな町での買物の事を考へたりして、爺さんの鈍い頭はお春に氣を付ける約束なんぞまるで忘れてしまつてゐた。

するこ急に馬車のガタ／＼いふ響や、馬具の軋る音の中に人聲がきこえた。爺さんは蟋蟀か、雨蛙か、それとも小鳥か

知らぬ思つたが、音のくる方角を聞き定めて頭を回らして見ると、お春の姿が馬車の窓から險呑だと思ふ程に突き出てゐた。長い黒い御下けにした髪が馬車ミ一所に揺れてゐた。その兒は片手に帽子をもつて片手はその小さな日傘で爺さんを突かうと骨を折つてゐるミころだつた。

「ちよいと御願ひがあるんです」ミその子が聲をかけた。

幸兵衛は、さつそくに馬を停めた。

「おぢさんの隣席よなりに乗るミ、餘計御錢ぜにが出るんですか、こゝはツル／＼にツつてベカ／＼光つてゐていけないの。馬車が大きすぎるんですもの、私一人であちこちへぶつかつてあざだらけになつてしまふね。そして窓が小さいから物がよく見えないの。私の鞆たもとが後からにがり落ちやしないかミ思つてふり回つて見るので、首が折れちまいさうよ。之は母さんの鞆たもとで母さんが大事にしてゐるの。」

爺さんはこの止め度のない話……非難ミいつた方が適當だらう……が途切れるまで待つてそれから剽輕に、

「来たけりやこゝへ來なせい。おらの傍へ來たつて別に餘計の錢はかゝらぬい」

と言ひ／＼手傳つてその兒を馭者臺に押し上げてやつて、自分の座席に戻つた。

お春は腰を下ろしてから几帳面に着物の腰の邊の皺を伸したり日傘を自分ミ爺さんミの間の凹みに置いたりした。それから帽子を額から押し上げて、繼ぎのある木綿手袋を脱つて、嬉しさうに、

「この方がよつほどいゝ。それこそ旅をしてゐるやうだ。やつと旅人になつたわ。中に居た時は卵を抱かせるつて塙へ押込めた牝雞メトリみたやうだつたの……まだなか／＼乗るんでせう」

「あゝ、やつミ出掛けたばかりだ。二時間の上かゝらあ」ミ爺さんは快く答へた。

「たつた二時間なの」ミ歎息をして「そうすると一時半ごろだから、母さんは御安さんミに居るし、家の子供達はう

ちで御晝食をたべてしまつて花姉さんが、跡片付をしてしまふ時分だ。私御辨當をもつてゐるの。母さんがね御腹を空して、おみね叔母さんここへ行つて、始つから叔母さんに御ぜんの支度なんかさせるのはいけないつて……すいぶん暑い日ですね」

「もうだね……暑すぎるよ。何故傘をささぬんだね。」

するとお春は、その傘の上に一層着物をかぶせるやうに擴けて、

「どうして〜、日が照つてる時には、翳さないのよ。桃色色が褪めやすいんですもの。だから私變つた日曜の時だけ教會へもつてゆくの。どうかするに急に日が出てね、この傘を庇ぶのに大騒ぎをするの。これ私の大事な〜ものなのよ、だけき随分厄介なの」

幸兵衛爺さんの鈍い心に、傍に座つてる子は日頃見馴れ聞き馴れてる普通の子供は餘程ちがつてゐるこいふ事が、やつと解りかけて来た。爺さんは鞭を鞭挿しにはさんで、泥除板から足を引込め、帽子を後ろへ押上げしやぶつてゐた烟草を路に吐き捨て、始めてお春をよく視た。見られてお春も親しさうにまた珍らしさうに眞顔で爺さんを見返した。

薄黄色のキャラコの着物は、色が褪めてゐるが、さこまでも小さつぱりしてゐて糊で硬はりきつてゐた。おつ立つた襷袢の中からその兒の細い頭が褐色に瘦けて出てゐた。腰の邊りまで太い三つ組になつて下がつてゐる髪を重みを支へられるか知らと思はれる程にその頭は小さかつた。白麥稗の變てこな肩庇つきの帽子をかぶつてゐるが、それが子供帽らしくて角はつてゐた。顔の道具は人並の數だけ供はつてゐたのだから幸兵衛爺さんの注意は鼻、額、願なきゝいふ處まで移らなかつた。途中「眼」のところ引かゝつて停滞してしまつたのである。お春の眼は薄くほんのりとした眉の下で、二つの星のやうに光つてゐた……ちらり物を見るさきの眼差は、一心で、興味をもつてゐて、しかも不満足氣であつた。じ

つゝ物を見据ゑる時の服は光輝を放つて神秘的で物でも景色でも人でも、表面を通り抜けて奥まで看透すやうに思はれた。お春のこの眼を説明する事は誰にも出来なかつた。畑ヶ谷村の小學校の先生も牧師様もやつて見たが駄目であつた。更田舎の赤い納屋だの破れ水車だの橋だのを寫生に來た若い畫家は田舎の風景を棄てゝこの子の顔ばかりを畫いた。ちいさな平凡の顔なのだが、その眼はまだ現はれないこの子の力と識見との暗示を與へてゐるので、誰でもその奥底を覗き込んでそこに見えるものは自分の思想の反影だなと想像したがつた。

幸兵衛爺はこんな抽象的な考へ方を無論しなかつた。その晩婆さんに「その子がおれを見るたんびにぎぎまぎしたぜ」
こいふやうな風に話した。

お春は幸兵衛爺と顔を見合せて、爺の顔をすつかりのみこんでから、

「梅村さんていふ女で、繪を畫く方が此傘を下すつたの、桃色で裝飾が二重になつてゐるでせう。柄が白くて尖端もさうでせう。象牙なの。柄は疵がついてゐるの。愛子がね、教會で私が傍見をしてゐるうちに浜めたりしやぶつたりしたの、それからは愛子を以前程に可愛いとおもはないわ」

「愛子こいふのは妹さんかい」

「え、妹の一人よ」

「何人姉妹だね」

「七人。『姉弟七人』ていふ歌があるでせう、「乙女はすぐに答へぬ。姉弟七人なり」とつていふ。私學校で暗誦するんで覺えたのよ。でも他の生徒つてば、ひきいわ、笑ふんですもの。花姉さんが總領で、私がその次で、それから太助、それからゑみそれから政次それから愛子それからみいらやん」
「なるほど大勢だ！」

「大勢すぎるつて他人がいひますよ」とお春が思ひがけずませた口をきくので、幸兵衛爺さんは「これやまあ」こいつて左の頬へ烟草を挿し入れた。

「一同可愛いよのよ。それや随分手が掛かつて而して、食べさせるのに御錢がいるけれど」お春はしゃべり續けた「花姉さんご私ごは、夜になると赤ん坊を寝かして、朝になるまで起こしてやつて、それより他に年中何もした事ないので、もう御仕舞になつたから嬉しい。一同成長くなつて、そして抵當の方が片がつくやうになつたらきつこいゝわ」

「もう仕舞ひになつたつて？ うん、家を出てしまつたからだな」

「いゝえ、もう果んでしまつたつていふの。家族ではもうすんでしまつたの。母さんがさういふから。母さんはなんでも約束通りになさるのよ。みいちやんが生れてからあごはもう生れないの。みいちやんは三歳よ。父さんが亡くなつた日に生れたのでね。おみね叔母さんは河崎の家へ私でなくて花姉さんを招びたがつただけれど、母さんが花姉さんに行かれると困るんです。姉さん 家事の用をするのが私より上手なの。昨夜母さんにね、もし私が留守の間に赤ん坊もつみ生れさうなら、私を直によこしてくれつていつたの。赤ん坊が居るご、花姉さんご私ご兩方入用んです、母さんは御飯こしらへと、島の方ごをしなくつちやならないから」

「百姓をして居るのかい。何處だね。先刻馬車に乗つたあの近くかへ」

「近いもんですか。何千里つてあるでせう。汽車で畑ヶ谷村から來たんですもの。そして長い事馬車に乗つて、御安さんとこへ着いて泊つたの。それから朝起きて錦ヶ森まで随分長く乗つたわ。そこからこの馬車が出たのですよ。私の村はごこからも遠いんです。小學校ご教會は畑ヶ谷にあるのたつた二哩位よ。かうしてこゝにおちさんと腰かけて居ると教會の塔へ登る位素的だわ。私の村の教會の塔へ登つた事があるのよ。人でも牛でも蠅位に見えるつていつたわ。まだ人行逢はないからいけないけれど、牛にや、すこし失望した。思つた程小さく見えないんですもの。でも(元氣ついで)牛

と並んでゐる時ほど大きくは見えないのね。男兒つて強氣な事をいつでもするものですね。女兒は残りものみたいな厭な話らない事ばかりするんだわ。さう高いところへも登れないしさう遠くへも行かれないし、夜遅くまで戸外にゐる事も出来ず、早く馳けられず何にも出来やしない。」

幸兵衛爺さんは、手の甲で口のはたを拭いて切なさうに息をした、山の峯から峯へ、ゆつくり息をつぐ暇もなく追ひ立てられてゐるやうな氣持がした。

「御前のうちがまだ判然何處たか解らねいんだ……おら畑ヶ谷へ行つた事もあるしもとあの邊に住んでたんだが何ていふ苗字だへ」

「近藤。母さんは近藤あさ。私達子供は近藤花、近藤春、近藤太助、近藤ゑみ、近藤政次、近藤愛子、近藤みね。母さんが子供三人の名をつけて、父さんがまた三人の名をつけたの。でも数が揃はないから、みいちやんには河崎のおみね、叔母さんの名を貰つたら宜からうつて父さんご母さんご二人できめたの。何かいゝ事があるかと思つたのですけれど、別にいゝ事もないので、今はみいちやんくつて呼んでます。私達はみんな誰かに因んで名がつけてあるのよ。ゑみは林ゑみ子つていふ聲樂家の名愛子は松原愛子つていふ美しい女傭の名を取つただけで、母さんはあてはまつてゐないつていふのゑみはまるで調子外れだし愛子は足がギョぢないんです。でも折角父さんがつけた名だからそのままにしてゐるの。母さんは私達に父さんの味方にならなくてはいけないつていふの。父さんは何をしても運がわるかつたので、運さへわるくなかつたら、死にもなさらなかつたんでせう。もう家族の事で御話する事ないと思ふわ」

と真面目な顔してお春は言ひ終へた。

「やれく。その位で澤山だよ。御前の御つ母が選り盡してしまつたからあまにやたんご名前が残つて居まいて。御前の記憶のいゝところ。學校でものを習ふにちつとも困る事はあるめい」

「あんまり困らないわ。困るのは、學校へものを教はりに行く靴を買ふ事なの。今穿^はいてるこれは買ひたてのほやく^はなんで、半年もたせなくつちやならないの。母さんは靴を大切に御しつていつでもいふんです。脱いで裸足^{はだか}で歩くより他に大事にしやうがないでせう。だけご河崎ではそんな事は出来ない。おみね叔母さんの耻になるから。叔母さんここへ行けば、すつこ續けて學校へ通つて、而して二年たつたら渡瀬の女學校へ入るの。母さんは、そうすれば私^{わが}がものになる筈だつていふの。學校を濟ましたら私梅村さんみたいな畫家になるの、まあそうしやうと考へてゐるんです。母さんは先生になれつていふけれど」

「御前のうちにも堀部つていふ人の地所だつたまごかね」

「いえ、近藤の地所つていふの。母さんはさういふの。私は獨りで金流園つていふ名をつけてます。」

「所在^{ところ}さへ分つてゐれば、名なんぞさうでもいふでねいか」と爺さんが尤らしくいふ。

お春は怨めしさうに、手厳しくちつと爺さんを見て

「そんな事いふもんぢやないわ。それぢや世間の人と同じになつてしまふ。物は名でちがひますよ。近藤の地所つていふはその面かけが眼に浮んで来て？」

「浮んでは來ないな」爺さんは不安さうに答へる。

「では金流園つていつたら如何いふ氣がして？」

爺さんは、魚が水を離れて砂の上で息苦しがつて居るやうな心持になつた。何にしても返事をごまかす術はないと思つた。お春の眼が、まるで探海燈のように爺さんの腦の中を貫いて頭の後部の禿^{はげ}までも觀てゐるやうであつたから。

「近くに小川があるんだらう」爺さんは怖々^{おそく}言つて見た。

お春は落膽^{おちぢかり}したが、全く匙を投けてもしまはなかつた。爺さんを勵ますやうに、

「あんまり見當ちがひでもない。おぢさんは緩まこいのよ熱がないんですもの。小川はあるけれど普通の小川ぢやないよ。兩岸に若い樹だの可愛らしい茂みがあつてね、水は浅くてサラ／＼音をさせてゐるの。水底には白い砂やピカピカする小石が澤山あるの。日が照るとね、水がきつ／＼それを受けて、一日キラ／＼光つてゐるわ。おぢさん、御腹が減らないの、私減つたわ。この馬車に乗り遅れるこいけなと思つて、今朝御飯が食べられなかつたの」

「ぢや今辨當を食つたらよからう。おらは當田町へ行くまで何も食はねんだ。あそこで「バイ」に珈琲一杯やるんだ」
「當田町へ行つて見たいわ。渡瀬よりも廣くて立派なんでせう。バリのやうう梅村さんがバリの事を話して下さつたわ。バリでこの桃色の日傘と南京玉の財布を買つてらしたのよ。バチン音がして開くでせう。こん中に二十錢入つてるの。之で三月郵便切手や紙やインキを買ふのよ母さんがおみね叔母さんはそんなものを買つて下さるまいつて……私を食べさして衣服を着せて學校へもやつて下さるのだから」

「バリは大きなところやねい」と爺さんはけなすやうに

「この縣のうちで一番詰らねいとこだ。何度も馬車でいつたがね」

お春は、黙つて靜に爺さんを非難した。その非難は眼でしたので彼女はちら／＼爺さんを見てすぐ／＼眼を他へ移したのが正しく非難の一瞥であつたのだ。彼女は教へるやうに、

「バリは佛國の首府で船でなくては行かれないんです。地理の本に出てゐるわ。佛國人は陽氣な禮儀正しい國民で、舞踏も薄い酒を好むつて。先生に薄い酒つてどんな御酒ですつて訊ねたら、作りたての林檎酒かジンジャビアの類だらうつて。私目を塞ぐとバリがあり／＼見えてよ。美人達が桃色の日傘を、南京玉の財布を持つてね始終面白さうに舞踏してゐると、紳士達が行儀よく舞踏をして、ジンジャビヤを飲んでゐるの。でもおぢさんは、目を明けたまんまでいつでも當田町が見られるのね」と羨ましさうにいふ。

「富田町だつて大きい事はねい」と爺さんは全世界の教會を經回つて、これも詰らぬものゝ定めたとはいふ風であつた」さ
今、おらがこの新聞を鈴木のかみさんの家へ投げ込むから見ておいで」

シユツ！ミ音を立て、新聞紙が狙違はず網戸あまごの前の靴拭の上に落ちた。

「ま、素的だ！」ミお春は夢中になつて聲を出した「曲馬團でうちの政次が見たつていふナイフ投げの人みたいね。何
軒もく網戸と靴拭のある家が並んでゐて、そして一軒々々へ新聞を投げ込みたいわね」

爺さんは少し自慢の氣味でにこ／＼して、

「投げ損ひもあるかも知れねいよ……おみね叔母さんがいゝといつたら此夏馬車が空の時、御前を富田町へ連れてつて
上げやうな。」

嬉しさがお春の身體に、買たての靴から麥藁帽の上まで、それから黒い御下けのミこまで傳はつた。彼女は爺さんの膝を
心を籠めて押しつけて悦びミ驚きで咽びさうな聲をして、

「ほんとなの、うそみたいだわ。富田町へ行つて見られるの。何だか仙女が出て来て、何か欲しいものがあるならやる
と言つてすぐそれを與れたやうだ。おぢさんなんか浦島や、小人島や、化け蛙の御伽話をよんだ事ある？」

爺さんは少し考へてから用心深く、

「いや。どうもそいういふのは讀んだ事はねいやうだ。ミこでそんなたんミ讀みなすつた」

お春は無造作に、

「私澤山讀んだのよ。父さんのや、梅村さんのや學校の先生達のや、日曜學校の圖書室の本なんかを。をぢさんは何の
本を讀んだの」

「御前のいふ本は讀まねいがな……でも昔はよんだものさ。今ぢや曆に中外週報に農業新誌位だ……また河のミこへ出

たこの山でしまいだ。この頂へ上るに河崎村の煙突が遠くに見える。もう遠くない。おらも煉瓦の家から半哩位のところに住んでゐるんだ」

お春は氣掛のらしく手を膝の上でもぢくさせ身體を動かした。そして聞こえぬ位に、

「恐いと思ふ事なんぞあるまいと思つたのに、やつぱり恐いんだわ……すこしはね。だんく近くなつて見るこ」

「家へ歸りたいかね」と爺さんは好奇心で訊いて見た。お春は憶せず爺さんにキラツと一瞥をくれて、それから傲然と。

「歸るもんですか。恐いと思つたつて逃げるなんて恥だわ。おみね叔母さんここへ行くのは暗闇で地下室へ行くやうなものだわ。階段の下に魔物の居るかも知れないけれど……でも花姉さんに私話すのよ、豆仙女だの、小人だの可愛いものもあるかも知れないつて……あの渡瀬村のやうに河崎にも大通りがあるの」

「あれを大通りといふんだらうな。御前の叔母さんは大通りに住んでゐるんだ。併しな、商店もないし工場もないし見すほらしい村だよ。少し氣のきいたものが見たけりや河を越しておらの居る方へ來なけりやならねい」

お春は歎息をして

「ま惜しい事だ。こんな立派な馬に曳かれて高い處に座つて眞實の大通りに乗つていつたらいよでせうにね。そうすると、村の人達が紫はしどいの花束と袍は誰人のだらうつて珍らしがるでせうしね。丁度行列で練つて行く美人のやうなのね。去年の夏曲馬團が畑ヶ谷に來た時、朝の中に村を練つて通つたのよ。母さんが私達をみんな行列に入つていつていつたの、みいちやんを乳母車にのせて……午後曲馬の藝を見に行くわけにいかなくつたから。その時ね檻の中に、きれいな馬や動物がゐたわ。そして道化が馬に乗つて。一番終に紅と金の馬車が來て、それを二頭の小馬が曳いてゐたの。その中の天鷲絨の蒲團の上に女の蛇使ひが襦子の着物をきてキラ／＼玉をつけて座つてゐたのよ。その綺麗な事つていつたらね、おぢさん、その女の顔を見るに胸が一杯になつて身體中ぞつと寒くなるやうなの。おぢさん解るでせう。誰かそんな心持にさせる人に遇つた事あつて」

爺さんは先刻からいろ／＼の事に出くわしたが、此時程不気味に感じた事はなかつた。しかし質問の要點を巧みに避けて「大威張りで堂々村へ乗り込んだつて差支はあるめいよ。おら鞭を取つて、眞直に構へてとつこと駈してかう。御前は花束を膝に載せてな、紅い傘さしなせい。村の奴等をつたまけさせてくれよう」

お春の顔は嬉しさに光り輝いたが、忽ちに力なくなつて、急いで

「私忘れて居たわ……母さんが中に乗せたのを。叔母さんここへ着く時には、やつぱり母さんは私に中に居させたいのかも知れない。中の方が上品なんでせう跳び下りて着物がまくれ上つたりしないで、戸を明けて淑やかに降りられるわけだから。おぢさん、一寸馬を停めて私に引越させて頂戴な」

爺さんはま直に馬を停めて、興奮してゐるお春を降ろし戸を明けて中へ入れてやつた……花束と桃色の傘をその傍へ置いて。爺さんは言つた。

「面白かつたなす。つかり心安くなつたね。富田町の事は忘れちやいけねいよ」

「大丈夫！ おぢさんもきつとよと」お春は熱心を込めて答へた。

「大丈夫、金の脇差しだ」爺さんも自分の席に戻りながら誓つた。

乗合馬車が河崎村の大通りの楓の並樹の間をゴトン／＼と進んでいつた時、窓から眺めて居た村の人は色黒の小さな子供が薄黄キヤラコの着物を着てチョヨン後部うしろの席に腰をかけて、大きな花束を片手に強く握り、片手に桃色の日傘をもつてゐるのを見た。その連中に眼のきいてゐるものがあつたら、この馬車が通りを曲つて古びた煉瓦家の横手の庭口に向つた時、キヤラコの着物の胸が心臓の烈しい鼓動で高くなつたり低くなつたり、青白い頬に紅味が消えたり現はれたりし、涙の雨がキラ／＼する黒眼に一杯たまつてゐたのに氣付いた事だらう。

お春の旅は終つた。

岡本の御かみさんが夫に向つて、

「田中の家の方へ馬車がまがつていつた。きつこ畑ヶ谷から姪つ子が着いたんだろ。田中の家でお朝さんごこへ手紙やつて總領の娘つ子を招んだらしいんだがおあささんが差支ないならお春の方をよこしたいつて言つたごいふからあれやお春だよ、うちのお駒に丁度いい友達だ。けれど田中ぢや三月置くまいよ。一寸見ただけだが色の黒い事く。そして出しやばりらしいわ。なんでも話に、近藤の家の方でここかの學校で音楽と外國語と教へてゐたのがスペインの女を嫁に貰つていふが、連造さんは色の黒い方だつたからね、こんごの子もさうだ。スペイン人の血統ちゆうとくだつて時代が經つてしまつてそして女の方の身分がちゃんとしてゐれば別に不面目だつて譯もないからね」(以下次號)